

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

# にしあいづ物語100選

その11

文：長谷川 隆夫<sup>たかお</sup>さん

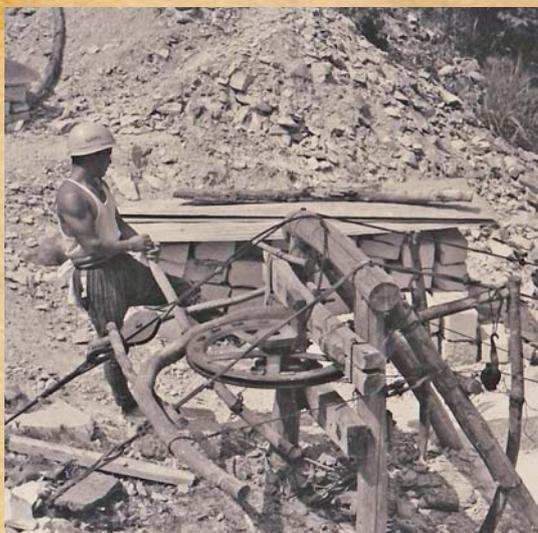
## 安座の砥石づくり

砥石は、刃物を使う人にとっては無くてはならないものです。特に草刈り作業は、昭和30年代までは鎌を使っていたので、すべての農家で砥石は必需品でした。現在では、農作業や大作業などの機械化が進み、砥石を使うことは少なくなりました。

この砥石の山元（採掘場）が安座にありました。安座の地層の多くは緑色凝灰岩であり、その中の砥石層と呼ばれる岩の中から良質の石を採掘するので、場所は限られていました。砥石の山元は、上安座からさらに山道を2割ほど登った標高570m付近の岩山で、面積は約2割の地域でした。

出荷工程としては、地山岩盤から原石を切り出し、一定の大きさに加工したものを一次集積所（荷馬車の使えるところ）まで運搬、そこから加工場へ運んで製品にし、貨車で問屋へ出荷しました。山元から一次集積所までの約1.5割は、土そり（山道に木を並べてそりを走らせるもの）と途中の河床部分は人力で運びました。後にこの区間は索道（鉄索）を架設しました。一次集積所からは荷馬車でそれぞれの加工場まで運びました。

砥石の採掘は、昭和10年頃石川勝吉氏が山元付近で鎌用砥石を作り始め、野沢・尾野本地域の農家に販売していました。自治区の記録によれば、野沢町の宮口七平氏が昭和11年から10年間の契約で採掘を始め、その後、安座の石川勝吉氏、佐川一氏、斎藤要氏、野沢の渡部氏、小柳氏、阿部氏などが採掘を継続し、平成7年に石川吉年<sup>よしとし</sup>氏が高齢のため採掘をやめたことで、安座の約60年に及ぶ砥石採掘の歴史は幕を閉じたとあります。（一部石川吉年氏からの聞き取り）



↑砥石の採掘場での作業の様子（昭和30年代ごろ）



↑砥石の採掘跡



### 今月の表紙

今月の表紙は、雪国まつりの初日に行われたホワイトストテージから。辺りが暗くなり、気温がぐっと下がりはじめた午後6時過ぎ、山岡トモタケ&剛のステージでは、歌声とともに白い息が夕闇に浮かびました。

### 編集後記

今年もさまざまなイベントで盛り上がった西会津雪国まつり。今月号にフォトギャラリーを掲載していますので、来場できなかった皆さんにも当日の雰囲気を楽しんでいただけたらうれしいです。

ちなみに、この2日間で私が撮影した写真はなんと1186枚！そのうち広報紙に使用した枚数は38枚……。実に148枚もの写真がお蔵入りなんです。でも、良さそうな写真はいつも数枚なので、このくらい撮らないと心配で心配で。えっ？もっと必要？

心配性のカメラ小僧 長谷川 祐一